

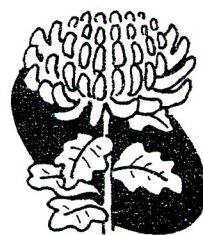
石仏調査ニュース

ちがさきの石仏

第5号

発行 茅ヶ崎市文化資料館
(市教育委員会)
編集協力 文化資料館と活動する会
(民俗行事部)

連絡先 茅ヶ崎市文化資料館
〒253 茅ヶ崎市中海岸2-2-18
☎0467-85-1733



狐狼痢(ころり) 除けの供養塔

塩原富男

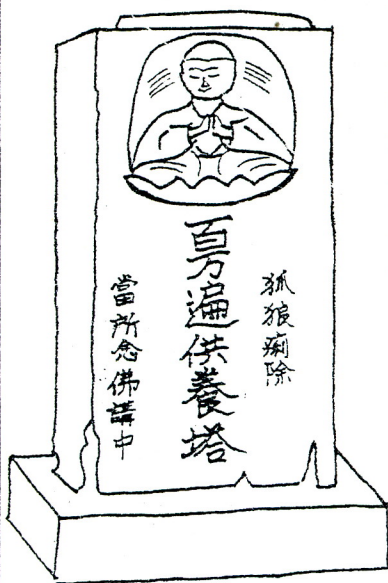
一 供養塔と銘文

行谷(なめがや)三一八に曹洞宗の宝蔵寺という寺があり、ここに狐狼痢(コロリ)除を願って建てられたと思われる供養塔があります。塔自体の存在は、茅ヶ崎市史三巻民俗編に「百万遍供養塔」として載っておりませんが、「狐狼痢除」の銘文の確認されたのは最近のことです。以下はその経緯と狐狼痢の検証です。

寺の山門は十数段の石段を上ります。その上り口の両側に石仏が建っていて、この塔は左側です。背後に新し

い観音菩薩の立像が建っています。ついでに記しますと、右側の塔は千手観音です。

この塔は、高さ六七センチ、幅二九センチ、厚さ二五センチの円頂角柱型で、正面上部に地藏尊と思われる合掌する僧形の座像が浮彫りされ、下部に「百万遍供養塔／狐狼痢除／當所念佛講中」右側面に「文久二年(一八六二)壬戌(みずのえいぬ)八月吉日」と刻まれています。「狐狼痢除」は市史の資料に出ておらず、当初の調査で見落としていたようです。



ことしの九月十二日、丸ごと村ごと調査グループに参加してここを訪れたとき、参加の皆さんで銘文を読んでいた、「百万遍供養塔」の右側に彫りは浅いものの文字が刻まれてるのをみつけ、ためつすがめつ判読を試みた結果「狐狼痢除」だろうということになりましたが、なんと読むのかと宿題になりました。

二 狐狼痢について

手元の辞典類ではズバリ「狐狼痢」はありませんでしたが、「虎狼痢」(コロリ)がありました。狐と虎の字は違うものの音は同じです。『広辞苑』によりますと、「コロリ (虎狼痢・古呂利)ころりと死ぬ意を掛ける。コレラの異称。とんころり、三日ころり、緒方洪庵の「虎狼痢治準」、浅田宗伯「古呂利考」と出ています。

「コロリ」はコレラ菌によって引き起こされる下痢を主症とする法定伝染病のコレラのことです。辞典類から拾うと音訳で「虎列刺」「虎烈刺」「酷烈辣」などが当てられ、暴瀉病と呼ばれ、霍乱(かくらん)とも言ったこともわかりました。

コレラという病名の語源をさかのぼると、ギリシャ語で、胆汁が流れ出るという意味があり、一方屋根のトイに

由来する説など、病状のひとつ吐き下しのはなはだしいありさまの形容であること、また、業病を意味するヘブライ語説(角川『外来語辞典』)があり、日本へはオランダ語として伝わった(講談社『江戸語の辞典』ほか)といいます。

三 コレラの流行と茅ヶ崎

人々がコレラ除けを願ったとすれば、塔が建てられ時代にコレラの流行という史実があったかどうか、裏付けがあれば狐狼痢とコレラが結びつくわけです。

コレラは、インドのガンジス川の流域に盤踞(ばんきょ)していた風土病で、一九世紀の近代文明の進歩と交通の発達と国際交流の波に乗って世界的に流行しました。

日本での最初の大流行は文政五年(一八二二)東南アジア、中国・朝鮮を経て西南地方に入り、山陽道から大阪・京都・伊勢路・東海道沼津辺まで広がり、患者が急斃卒倒(きゅうへいそつとう)するので、「コロリ」或いは「三日コロリ」と呼ばれ、暴瀉病ともいわれました。

二回目は安政五年(一八五八)で、この時は長崎から入り、ほぼ全国に広がりました。(オランダ人医師のポン

ペへ一八二九〜一九〇八)『日本滞在見聞記』によると長崎入港の米艦ミシッピースー号が持ち込んだ。病勢激甚、九州・四国から大阪・京都・江戸、遠く箱館に及び、江戸だけで死者一〇万余人(一説に二六万余人)といれ、江戸の民衆は「ころり」と呼んで恐れたといえます。

三回目は文久二年(一八六二)で、

翌年に及びました。流行の季節はいずれも七〜八月が大変だったようです。

以後の流行を略記しますと、明治十年、同十二年、十五年、十九年、二十三年、同四年、三十年と繰り返し、明治年間の死者三七万人、日清・日露戦争の死者より多かったといえます。明治十二年(一八七九)に「虎列刺予防仮規則」ができ、同三十年(一八九七)には「伝染病予防法」が公布されて、海港検疫の確立とともに終息しました。

戦後の昭和二十一年(一九四六)「復員コレラ」といわれたものがありました。たが、以後発生がありません。幸いなことです。(平凡社『日本史大事典』・岩波『日本史辞典』・角川『外来語辞典』ほか)。

当地方の場合などはどうだったかといえますと、旧柳島村の名主、柳庵・藤間善五郎(一八〇一〜八八)が、幕末から明治維新の嘉永六(一八五三)

明治五年(一八七二)の世相を書き残した『太平年表録』(以下年表録)の第三編、安政五年のところに流行病の記述があります。

原文を少し読みやすくして要約しますと、「世上に七月中旬より怪有(けう)の病が流行して、死者が数えきれなかった。この流病は、はじめ、ふと魂飛び眼くらみ、覚えず転倒し吐瀉甚だしく相成り、暫時の内に総身が冷えわたり薬汁を服容せず、気血を洩らし虚腹となり、一日か二日にして枯死する。…最初御府内(江戸)市中などでは三日転りと唱え、八月には二日転り一日転りなどといいはやした。…この病、松平隠岐守殿参府の節についたとの説がもっぱらで、すでに小田原駅に止宿した御供の面々二三十人が即死し、それより同駅で流行と伝えられ、御通行の節は路傍の民家は門を閉ざし、呪咀の赤紙を張って流病を除せんとするものが軒を算えた。…されば諸人は神仏へ祈誓し、不時に氏神の祭祀を営み、神輿を出し神子(みこ)の神楽をささげ、神霊を慰めた。あるいは家業を休み、念仏、真言、題目に日を費やし、中には野狐に干(おか)されたら、修験をたのみ火生三昧や熱湯入の薬法を受けた。…」。文中の流病は流行病(はやりやまい)と同意で、「転

り」と表記してはいますが、これは「ころり」(コロリ)であり、コレラだったと思われず。

さらに流行経路の有様などについて、次のように記します。「この病、近江、美濃、丹波から五畿内、関西、駿、遠、参がはげしく、伊豆から関東に入り、小田原を始めとして、東海道筋は北は二三里、南は海岸つづきの片瀬、腰越、江之島では、一日か二日で死ぬのを恐れて家内を片つけ、三社弁才天へ参籠したり龍口寺へ馳けこむ者少なからず、三浦郡では場所により戸を閉めて凌ぐといひ、三崎、浦賀では死者が多かった。」

柳島村の様子については、「我居村にも彼の暴瀉人出来、暫時に死消するもの三四人、野狐に犯されたと修験のものを乞ひ、狐狸離いたすの類かたがた以て患難やまず、之により村中申合せ武州御嶽山へ登山し、霊狼を拝受し、鎮守の社内へ勧請し、猶大山不動尊へ誓いをかけ、地藏院安置の不動尊を守立、老若男女挙って慈救の呪いを唱え、流病退散を旨として家前を巡行させた。その神意赫奕(しんいかくえき)として野狐の怪忽ち退消し、不日にして病人癒りければ、未だ神仏の加護を願うの他無き哉」と記し、神仏の加護の絶大であることを述べています。

そして「右流病二付御触の写」を載せ、「芳香散」などの処方を書き残しています。(『茅ヶ崎市史4』ほか)

四 石仏建立との関係

宝蔵寺の供養塔が建てられたのは文久二年(一八六二)八月です。前記のように、日本における二回目コレラの大流行は、建立に先立つこと四年の安政五年(一八五八)で、全国的な広がり、年表録が記すようにこの地方でも大恐慌であり、東海道筋から二三里のうちに入る行谷村でも身近な問題だったと思います。

人々は神仏の加護を求めて百万遍の念仏を唱えて祈ったに違いありません。そのとき戸数二〇数戸のこの村から患者がどれだけ出たかどうかは不祥ですが、おそらく大変がなことだったでしょう。そして建立の年、文久二年にも流行のことが耳に入ってきて、念仏講がつづけられ、この年は難を逃れたかどうか、これまた定かではありませんが、建立に至ったものと思われず。

この前後、市域における石仏の建立状況を見ますと、柳島村では念仏供養塔などは建てていませんが、旧小和田村のうちで、いま代官町の寺蔵堂に、コレラ流行の年である安政五年九月に建てられた百万遍供養塔があります。

ここは往来の多い東海道沿いですから、流行の余波を受けないはずはなく、願文はみられません。コレラ除けと関係があったかも知れません。

五 狐狼痢と虎狼痢

供養塔に刻まれた「狐狼痢」の表記にみられる「狐」と文献に出てくる「虎」の違いを考えてみました。なぜ日本には棲息しない虎が当てられたのか、多分狐より強い存在と考えられていたからと思われませんが、当時、コレラ菌の存在は確認されておらず、適切な予防法や治療法もなく、野狐に犯されて臓腑を食われるのだという風評がもっぱらだったり、御嶽山の霊狼を拝受して勧請して祭るなどの事を知ると、「狐狼痢」の表記は、この地方の世情を反映した表記だと納得できるのではないでしょう。いずれにしても、疫病除けに神仏の加護を求めることが多かった時代の石仏建立との関係を知ることができません。

ちなみに、コレラ菌は、一八五四年イタリアの解剖学者パチーニ(一八一二〜一八三)が発見し、一八八四年にドイツの細菌学者コッホ(一八四三〜一九一〇)が純粹培養に成功、これを確認したとされています。(『広辞苑』)

調査済み石仏一覽

第四号までに記載以降の石仏を紙面が許す範囲で紹介します。

■平成十一年五月二十一日

○平太夫新田 八幡神社

地藏 丸彫立像

地藏 丸彫立像

庚申塔 天和三年(一六八三) 光背半肉彫

石祠

鳥居 明神又は春日型

鳥居(残骸)

灯笼(笠と宝珠)

灯笼(基礎部)

灯笼(竿と基礎) 丁丑の字のみ見える

灯笼(火袋)

灯笼(竿部分) 明治四四年(一九一一)

灯笼(笠部分)

灯笼(笠部分)

石塔 元治元年(一八六四)

道祖神 安政二年(一八五五)

松下平太夫供養塔 宝永二年(一七〇五)

笠付角柱文字

線香立て?

■平成十一年七月十六日

○萩園 満福寺

地藏 寛文六天(一六六六) 光背半肉彫

弘法大師 明和元年(一七六四) 丸彫坐像

○萩園 三島大神

灯笼 明治一五年(一八八二)

手洗石 明治一二年(一八七九)

五智如来 嘉永六年(一八五三) 角柱文字

○萩園 十二天社

灯笼(残骸) 元禄六年(一六九三)

道祖神 安政五年(一八五八) 角柱文字庚申

塔 元禄七年(一六九四) 笠付角柱立像

鳥居 昭和一五年(一九四〇)

○萩園 常願寺

手洗石 宝暦七年(一七五七)

○萩園 八幡神社

地藏 享保五年(一七二〇) 角柱文字

○萩園 一八二一 畑の角

馬頭観音 元治元年(一八六四) 角柱文字

馬頭観音 昭和二年(一九二七)

○萩園 一六六〇 石井氏邸角

道祖神 嘉永元年(一八四八) 角柱文字

○萩園 共同墓地角

題目塔 元禄一六年(一七〇三) 角柱文字

○萩園 日枝大神

道祖神 天保一三年(一八四二) 角柱文字

○萩園 山王社

鳥居

○萩園 常願寺

浄行観音菩薩

丸彫立像

■平成十一年八月二十日

○萩園 満福寺

宝篋印塔 寛保元年(一七四一)

石仏調査に参加しませんか

茅ヶ崎市文化資料館では、市民の方々と、市内の石仏を調査しています。

一緒に参加してみませんか。

行うことは、石仏のスケッチ、計測、写真撮影、銘文の判読などなど。

来年三月までの予定は次のとおりです。

十一月十七日(金) 小和田地区

十二月十五日(金) 未定

〃 二十一日(木) 午後 調査整理 一月十日(金) 未定

二月十六日(金) 未定

〃 二十二日(木) 午後 調査整理

三月十六日(金) 未定

あんない

茅ヶ崎市郷土芸能大会

十一月二十六日(日)

午後一時〜四時

市民文化会館小ホール

吾妻鏡に見る中世の湘南

十三年一月二十日(土)

〃 三月三日(土)

(史跡めぐりの外は毎週土曜日午後)

講師 八幡義信先生

往復はがきで生涯学習課へ申込み